



Title	イエズス会インド管区の基礎的経済構造
Author(s)	高橋, 裕史; Takahashi, H
Citation	基督教学, 40, 25-27
Issue Date	2005-06-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46690
Type	journal article
File Information	40_25-27.pdf



イエズス会インド管区の 基礎的経済構造

高橋 裕 史

イエズス会は、創設後、四〇年ほどの間に東インドに進出し、教勢を拡大することに成功した。この背景として、イエズス会と会員が一体となつて、様々な布教戦略を實行し得たことが、指摘できよう。しかし、これだけでは、イエズス会が広大な東インド各地に宣教師を大勢送り込み、宣教・改宗活動を行ない得た事実に対する説明は、困難ではなからうか。

地上に「神の国」を築くためには、いうまでもなく、宗教的な強固な動機が、極めて大きな役割を果たすわけであるが、反面、地上という世俗の中に入り込み、そこを舞台として活動するからには、世俗の有する「力」を活用し、同時にそれを布教戦略の一部に組み込むことが、

回避できなかった筈である。

そこでこの報告は、右に提起した問題意識を踏まえて、大航海時代のイエズス会が、どのような物質的基盤を基礎的経済構造として保有していたのか、その概略を把握することによって、イエズス会が創立後短期間の間に世界的規模にわたつて教勢を拡大し得た理由の一端を考察するものである。

I ポルトガル人による喜捨

ポルトガル人からの喜捨は、その性格上、大口のものではなく、主として日常の備品や教会などの建物の修繕貧者への施しなど慈善事業に使用されていたらしいことが史料から確認される。いずれにせよ、イエズス会全体の経費を賄うに足るほど巨額なものではなかった。そのため、喜捨に代わる大口の安定した財源が不可欠となり、それがポルトガル国王給付金と各種の貿易活動であった。

II ポルトガル国王給付金

当時のポルトガル王室は「布教保護者」として、年度

給付金という形でイエズス会を援助していた。それ以外の形式では、マラッカの関税の一部や、インド国内の土地を付与していた。国王給付金はイエズス会の教勢拡大と共に、増額されていったが、その支払い状態は悪く、また実際に支払われる額も名目額よりも少なく、大口の財源ではあったが有力な資金源とは言い難い面もあった。

III インド国内の不動産収入

これは土地が主で、その土地から上がる米の年貢や椰子林などの売却益を収入に充てていた。また家屋を賃貸し、そこからの家賃収入も貴重な財源となっていた。米作や椰子林などの収入は、自然災害による被害など、恒常性に欠ける面はあったが、インドにおける土地収入は概してイエズス会に安定した収入をもたらしていた。

IV 貿易収入

貿易収入ではマカオ⇨長崎間の生糸貿易が非常に大きな財源となった。このマカオ⇨長崎間の生糸貿易はポルトガル国王とローマ教皇、イエズス会総会長から唯一公

認された貿易であり、利益が大きい時は年間経費の六〇%を捻出していた。これ以外の貿易では、マカオ⇨インド間の貿易が重要であった。生糸以外の商品として、絹織物・綿織物・金・麝香・竜涎香・陶器・砂糖・薬品などがあった。また日本の政治的有力者から銀をあずかり、それをマカオにもたらして希望する商品を仕入れて日本に帰国するという、一種の「貿易幹旋」業も行なわれていた。

V インド管区財政の一般状況

財政の一般状況は、おおむね悪く、慢性的に資金不足であった。財政難を打開するために、日本のイエズス会は利益率の大きい貿易活動に拍車をかけ、内外から批判を浴びることとなった。この問題を「国家と修道会」という文脈で考えると、ポルトガル国王によるイエズス会への財政援助は、布教保護者としての「義務」であった以上、イエズス会側では、ポルトガル国王に資金を「要求」するのは当然の権利の執行であった。反面、経済援助という「恩恵」を受けるからには、イエズス会側もポ

ルトガル国王の富を増大させることが、宣教師たちの果たすべき「奉公」でもあった。

おわりに

イエズス会は右に見た各種の財源を基礎的経済構造として、教団運営に編入して行ったのであるが、この財源の確保という地上の問題をめぐって、イエズス会内部では、主要な布教地同士の軋轢が表面化することとなった。例えばゴア、コチン、マラッカでは日本の資金が不正流用され、この四布教地間の関係は悪化し、清貧に関する『イエズス会会憲』の規定の空洞化、という深刻な内部矛盾を抱えることとなったのであった。

(本稿は平成十六年度「科学研究費補助金」による研究成果の一部である)

研究発表要旨

木造教会建築の礼拝室天井高

確保の空間演出について

日本基督教会遠軽教会と元田稔の教会建築を対象として

川 島 洋 一

はじめに

本研究は近代建築史の中で登場したキリスト教の教会建築で中心的な空間である礼拝室の形態的特徴について考察し、日本社会でのキリスト教建築史の一側面を明らかにする事が目的である。

本稿では礼拝室の断面形に注目し、特に天井高確保によって礼拝行為を包む効果的空間演出のための構造的特徴について、現存する昭和初期木造建築の日本基督教会「遠軽教会」と、また昭和二〇年代以降の教会建築を手がけた元田稔の作品を対象として考察した。